

西成の大阪中華街構想の行方は??

～公開学習会（第217回まちづくりひろば）の報告特集②～

これも世界的流れの一つだったのカー～

ワシと中華門を組み合わせるんかい・・・ウ～ムムム(汗)

山下清海さんのお話から(抜粋)
(立正大学教授、筑波大学名誉教授/地理学)



世界中のチャイナタウンを足で調査研究されている、この道の第一人者。いつの間にか西成にも足繁く通っておられたのには感服



【世界に膨張する華人社会】

起点は鄧小平時代の改革開放政策（1978 年末～）。そこから出国ブームが始まり、それ以降が新華僑、以前が老華僑と呼ばれる。これにより**世界の華人社会は 1995 年頃は世界で 2500 万人⇒現在では 6000 万人に膨張**。居住地も①オールド・チャイナタウン（日本では横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街）②ニュー・チャイナタウンとに分かれる。（以下、本文ではチャイナタウンはCTと略す。なお、日本では中華街＝観光地ととられるが、両者は別）①は老華僑の現地化と後継者不足深刻化等によりベトナム、タイなど東南アジア系新華僑が流入して、料理も広東料理系だけでなく多様化が進んでいる。②は裕福になった華人たちが住む郊外に形成されつつある。トロントではダウンタウンに2つあるが、郊外の住宅地に新たに4つできた。不動産投資の目的も重なる。NY、パリも同じ。ドバイでは中国の投資が流れ込み、チャイナ・モールが形成されている。

【日本の事例。計画設定型は失敗】

屋内型中華街が国内各地で構想あるいは実際に形成されたが、ことごとく消滅してきた。東京の立川、台場、大阪の千里、名古屋の大須。構想段階で消滅したのは仙台中中華街、新潟中華街。これらの共通点は、開業当初は多くの来訪客があるが、リピーター客の維持が困難になること。来訪客が求めているのは単なる料理とか物産だけでなく、中国人が生活している臨場感なので、「創られた虚像の中華街」はすぐに飽きられる。世界の事例と併せて考えると、「自然形成」型は発展の可能性はあるが、「計画設定」型は失敗する。

【池袋CTの行方が要注目】

（中華街ではなく）ニュー・CTとしては池袋が日本最初のものと言える。ここは現代中国に最も近い街で、**多民族化がどう進むか日本の試金石**となるだろう。その形成過程で地元との衝突をひきおこしている。構想は北京五輪開催の2008年に発表され、マスコミが取り上げた。地元商店会の反応は、「初耳だ!そんな話は聞いていない!この地区は我々が代々、苦勞して築いてきた街だ!中国人は街のマナー、ルールも守らず、商店会にも入らないで、何を言うのか!」と。2010年には計画反対集会も開かれた。地元住民との相互の信頼関係が最重要であることを示した。結局、「ボタンの掛け違い」で失敗と言える。対処法を誤り、後々まで双方に食い違いが生じたまま、社会的には存在が認知されてきた。单身時は池袋在住だった新華僑たちが、結婚して集住し始めたのが西川口（埼玉）CT。これも郊外化だ。ここには旧・住宅団体の老朽賃貸住宅の空き室が多く、入居時の諸費用が不要で国籍制限も無かったことが大きい（約5千人の住民の半数が中国籍）。

【西成中華街構想の特徴や将来予測。掛け違ったボタンを戻せるか】

特徴は ①中国料理店が集積中とかではなく、カラオケ居酒屋が中心。これはたいへん珍しい。②形成地は通常、周辺に住む華人の生活を支えるための店舗や団体等が集まる地域なのだが、西成ではそのサービス機能は乏しい。③福建省福清出身者が多い。同地域からは戦前から日本に反物（呉服）などの行商で来日していたが、その老華僑を頼って来た同地域の新華僑が多いようだ。共通点は西成も池袋CTも、元の地域イメージが良くないこと、それゆえに「よそ者」が入りやすいし、東京中華街とか大阪中華街とか、大きな構え方をする点も共通。重要な違いは、西成では自分たちからCTと自称していること。その点、他地域は世間がいつの間にか呼び始める。池袋CTは私が命名したし、大久保コリアタウンでは「コリアン自らコリアタウンと言い出してはいないんですよ。それをしたら、日本人の中には不快に思う人がいることを、我々コリアンは認識していますから」と語った人がいる。とても示唆的な話だ。結局、西成の「大阪中華街」成功の条件は、**地元住民・中国人（外国人）・行政、この三者相互の信頼関係ができるかどうかにかかっている**と言えよう。

世界や日本国内の他事例と比べてどうなん?

参加者も交えた意見交換

- 中華街構想では、華人同胞へのサービス機能も含め、地元の人々みんなが共感できる事をやって広く巻き込もうという意志を感じないのですが・・・
- いや。たとえば、てんしばでの春節祭は、中国人だけでなく、日本人も来てくれるイベントをやっています。カラオケ居酒屋の限界は感じていて、自分たちなりに考えてはいるが、地元には伝わっていないので、確かにボタンのかけ違いになっていると言えますね。
- 生活感がなくて、プロパガンダを感じます。この点で西成の中華街構想は特殊です。不動産業とカラオケ居酒屋のみで。そもそも中国料理店が無い。あれば、中国らしさが出てきて、行ってみようかと思うはず。いろんな人がいて、多様性のある発展をしていけばいいのに。
- カラオケ居酒屋ばかりで、防音もさほどされていない、という状況は商店街にとってもプラスになっていないです。ボタンのかけ間違いどころではないと思う。
- 生活保護の人々を客として囲い込んだという点での大成功だと言えませんか。商店街400店舗のうち150店舗にもなり、「限界だ。業種転換が必要」と推進メンバー自身が述べていますし。しかし、業種転換は進まないで、空き地空き家物件の買収だけ進んでいます。
- 西成での中華系の人々の居住実態は、調査ではけっこう店の近くに住んでいます。芦原橋だと、アパートのうち3割は中国人。10年後は6～7割かも。保育園、子ども食堂で姿を見せます。1年ビザの人も定住の人もあります。
- 聞いてみると、結局、不動産業者としての次の一手ではないのか、という気が私はする。
- トップダウンのような大構想の持ち込みではなく、おいしい中国料理屋1軒をとりあえず持ってくれば周囲の反応が変わる話ではないのですかね。
- 私も中国は若い時から頻りに旅している。中国は90年代に周辺国に中国人街投資モデルの輸出を行なったんです。西成では小さなカラオケ居酒屋から始まったとしても、マンマーなど東南アジアでやったモデルの進め方を日本でもやっている。彼らは1世なので日本社会の感覚をわからないのだと思います。
- （マナーは治るか?）治ると思う。（ゴミ問題は改善する?パフォーマンス?）中国から来てまもない人たちは繊細さを理解できないのだと思う。1世だとコリアンでもその点は無理ですよ。中国本土では窓からモノを放るのも珍しくない。今、民泊で起きているのも同じ現象です。かつての日本人だってそうだったが、今はルールを守って、良くなっています。
- この地域にはこの中華街構想以外に不動産投資ファンドがあと2～3社来ているようです。1000室買おうとしているところもあります。あいりん地域まちづくり会議有識者委員による大阪市長への提言（2018年10月）では当地域の「地の利と包摂力」の2つの強みを両立させたまちづくりが提言されています。米国では多様性を大事にしたインクルージョンの考え方が重視されているとの本日の講演でしたが、すでにこの街でもやっていることです。中華街構想グループも含めて不動産投資関係者たちとはどこかで面と向かって話し合うべきでもあります。



↑大先輩格の生野コリアンタウン。だんじり祭りも共存。ここに至るまでに長い歴史を要した



大阪中華街構想が想定されているエリア（飛田本通り商店街一帯）。白くアーケード屋根の走っているところが商店街。

主催団体は「近いうちに、中華街構想推進グループや星野リゾート関係者などのお話を直接聞ける場もつくりたい」との希望よ。顔が見える関係づくりは良いことね。

